



アール・ブリュット 2020 特別展

「満天の星に、創造の原石たちも輝く -カワル ガワル ヒロガル セカイ-」

アーティストプロフィール

(五十音順)

鵜飼結一朗 (うかい ゆういちろう)

1995 年生まれ 滋賀県在住

百鬼夜行を彷彿とさせるような画面は、実にコミカルで独創性に富んでいる。図鑑や絵本、漫画やアニメを見ることを好み、そこから選んだ人や恐竜、昆虫、動物、妖怪、おばけ、骸骨、キャラクターなどの幅広いモチーフを混在させて画面を共有することで、鵜飼の独特な世界観が創出されている。

岡元俊雄 (おかもと としお)

1978 年生まれ 滋賀県在住

岡元が使用する画材は、墨汁と割り箸。モチーフは雑誌や画集などをもとに模写をするが、ダイナミックなストロークで描かれた人物たちは大胆にデフォルメされる。好きな音楽を大音量でかけ、膝を突いて寝そべりながら割り箸に墨を浸し、全体の輪郭を描いた後、輪郭線を何度もなぞるように墨を塗り重ねることで作品が出来上がる。

勝部翔太 (かつべ しょうた)

1991 年生まれ 島根県在住

高さ 3 cm 程の大きさで、精巧に作られた小さな戦士たち。素材は、お菓子やパンなどの袋を閉じる際などに使うビニールタイ。自宅で何百という戦士を作ってきた。一体一体の戦士は、ポーズも武器も配色も異なっている。2013 年にウェルカムコレクション (イギリス) で開催された「SOUZOU - Outsider Art From Japan 展」後に 50 点が収蔵され常設展示されている。

勝山直斗 (かつやま なおと)

2006 年生まれ 埼玉県在住

壁画制作が始まったのは、2012 年。何もない部屋の壁面に向かい、指に唾液をつけ、壁紙を何回もゴシゴシと擦り、壁紙を剥がすことで壁に絵を描いていった。絵のモチーフとなるのは、動物や植物、昆虫、電車、アニメのキャラクターなどである。施設で他の子供たちが寝静まった頃、夜空を眺めては、鼻歌を歌いながら壁画制作を行っている。



木村全彦（きむら まさひこ）

1984 生まれ 京都府在住

木村は、通所している施設で絵を描くようになった。モチーフは、大相撲、稲荷神社、お祭り、東京タワー、写楽などさまざまで、施設の職員と一緒に雑誌や図録などから選んで描いている。木村の極細を捉える視野を通して見たものが描かれた作品は、世界を光の粒で捉えているようである。その光を表現した幾何学模様を組み合わせることによって、陰影や立体感を、躍動感溢れるタッチで表現している。

古久保憲満（こくぼ のりみつ）

1995 年生まれ 滋賀県在住

創作は小学校に通いはじめた頃よりはじまる。古久保はこの世界（社会）の形に興味があり、インターネットやテレビ、歴史の本、旅先で撮った写真などから自分が描きたい題材や情報を集め、紙面に書きこんでいく。国内外での出展の他、古久保を追いかけたドキュメンタリー映画「描きたい、が止まらない」（2019）が製作され上映されている。

Yasuhiro K.

1983 年生まれ 北海道在住

同じ構図で描かれた 6 枚の都市風景は、数年に及んで毎年描かれている。毎年夏、札幌に出かけるのを楽しみにしており、6 枚の絵はテレビ塔から撮った写真を元に描かれた。全体の構図を取らず、左隅から正確に空間形成を行っていくが、比率を測ることをせずとも、縮尺を正確に描き出していく。

澤田真一（さわだ しんいち）

1982 年生まれ 滋賀県在住

陶芸を始めたのは施設に通うようになった 2000 年頃からである。初期はトゲが鋭く大きく、密集せずに配置もバラバラであったが、2010 年頃からはトゲが綺麗に整列することを好むようになった。モチーフには鬼、龍、ふくろう、たぬき、カエルなどがある。制作には強い一貫性があるが、他者との関わりの中で変容しつつ、ゆるやかに新たな創造へと挑戦し続けている。出展歴に 2013 年の第 55 回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展など。

鯨万里絵（すずき まりえ）

1979 年生まれ 長野県在住

緻密に点画され、乳房や性器、無数のはさみなどのモチーフが色鮮やかに描かれている。最初から完成されたイメージがあるわけではなく、はっきりと浮かんだイメージから描いていくことが多いようだ。国内外での出展のほか、2014 年に地元長野の信毎文化事業財団による第 19 回信毎選賞を受賞するなど、活躍の場を広げている。



高橋甫（たかはし よし）

1974－2015 年 徳島県出身

高橋は、人間関係に行き詰まって 19 歳頃から自宅に引きこもり、32 歳頃から制作を始めた。高橋の作品では、黒の線が幾重にも交わることで立体的なモノクロームの世界が浮かび上がってくる。当初の絵は抽象的だったが、徐々に具象的なものになり、自己を表す“擬獣化”された動物や、敬愛する祖母などが度々登場する。

シー・ジェイ・パイル

1956 年生まれ 米、インディアナ州出身

子供の頃から顔を描くことに夢中だったパイルは、学校に通い始めた頃から絵心に目覚め、色彩や様々な技法は図書館の本から学んだ。2000 年頃に新たな芸術領域を開拓し、肖像画を描き始める。30 年にわたり自身の創造的可能性を広げながら 2 色で制作する独自のスタイルを築き、作品は米国や欧州など、各地のギャラリーで展示されている。

原塚祥吾（はらづか しょうご）

1995 年生まれ 長崎県在住

本作はタイトル「繋がってゆくまち」のとおり、一枚一枚の同サイズの作品が上下左右に繋がることで一つの大きな風景画となる。描かれた街は実在する場所ではなく、原塚の想像したオリジナルの風景である。原塚は 10 歳の頃からこの連作に着手し、数年に一枚のペースで現在まで 14 枚の作品を描いている。高所から街を見下ろすことが好きな原塚が、自身の優れた記憶力で再構築して描く繊細で緻密な風景である。

三浦明菜（みうら あきな）

1987 年生まれ 北海道在住

三浦は、女性や男性、子供や動物などの生き活きとした姿をモノクロームで描いている。画用紙から長いロール紙まで素材の大きさは様々で、大正から昭和期の写真を片手に画面に向かう。HB から 10B まで揃えられた鉛筆からその時々で好きなものを選んで、マス目を作り、その中を塗り込んでいく。

ミスター・イマジネーション

1948－2012 年 米、イリノイ州出身

貧しい環境で育ち、独学で創作を学んだ。30 歳の頃に銃で撃たれて 6 週間昏睡状態に陥り、古代文明の幻影を見た経験を機に芸術の新たな創造性に目覚める。砂岩の破片やボトルキャップを使った顔の彫刻などの制作に取り組み、身近な素材を再利用して数多くのオブジェや家具、建造物を制作した。2011 年に第 54 回ヴェネチアビエンナーレに出展。作品は米国を中心に多くの美術館に収蔵されている。



美濃部 貴夫（みのべ せきお）

1968 年生まれ 三重県在住

美濃部の制作には独自のルールがあり、まず「小さな枠を描き、その中に仕切りのようなものを描き、最後に細かな縦線で埋め尽くす」という工程を何度も繰り返していく。配色は作品ごとにあらかじめはっきりと決まっている。さまざまな色のボールペンが傍らにあったとしても、最初に決めた色からは変えることなく、描く手順から配色に至るまで、確固とした美濃部のセオリーが存在している。

本岡 秀則（もとおか ひでのり）

1978 年生まれ 兵庫県在住

縦方向に伸び、押し寿司のようにギュウギュウに詰まった電車の数々。本岡は自宅で制作を行い、コピー用紙やチラシの裏側を利用し、電車の正面を切り取り、配列（描画）していく。電車には一つ一つに車番があり、判別可能な電車として描かれている。出展歴にアール・ブリュット・コレクション（スイス）「JAPON」展（2008－2009 年）など。同館に作品も収蔵されている。

森田 郷土（もりた さとし）

1978 年生まれ 滋賀県在住

森田は 1997 年から滋賀県にある工房に通い、清掃メンテナンスなどの仕事をしながら作品制作をしている。紙に描かれる作品は人や動物を表していると思われるものが多いが、タイトルはすべて「点と線」である。鉛筆で描かれた構図がボールペンの点と線の集まりにより立体を感じさせるものとなっている。

渡邊 義紘（わたなべ よしひろ）

1989 年生まれ 熊本県在住

「折り葉®」と名付けられたこれらの作品の発想と制作は、類を見ない。毎年クヌギの葉が落葉する 11 月頃、渡邊はその葉を拾い、さまざまな動物を立体的に折り出す。逡巡する様子もなく、1 体 15 分程で、2～3 cm くらいの動物をつくる。10 歳頃からは、「折り葉®」作品以外にも切り絵や陶芸など多岐にわたり制作している。